

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0793240011		
法人名	社会福祉法人 おおくま福寿会		
事業所名	グループホーム やすらぎの里		
所在地	福島県双葉郡大熊町大字夫沢字南台152番地の2(原発事故による避難先:福島県会津若松市一箕町松長1丁目17-1松長近隣公園応急仮設住宅敷地内)		
自己評価作成日	平成28年1月13日	評価結果市町村受理日	平成28年4月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/07/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県シルバーサービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	平成28年3月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

原発事故により会津若松市の応急仮設住宅敷地内で事業を再開している。会津は大熊町と違い雪が多く冬場はほとんど外出出来ない為、暖かい季節に外出や行事等を増やしている。又、ふるさと祭りや集会所での地域の人達との交流会等様々な体験や交流などで生活の中に楽しみを多く取り入れている。慣れない土地で家族と離れて暮らす寂しさや不安な気持ちを受け止め、安心して落ち着いた環境作りや言葉かけ等の対応を心掛けている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

1. 日常生活の中で、常に利用者の意向や要望の把握に細心の注意をはらい、利用者一人ひとりに寄り添いながら意向に沿った支援に努めており、家族等からの信頼も得られている。
2. 避難先の仮設事業所での生活を余儀なくされているが、日常的な散歩、買い物、花見、名所地への外出や地域行事に参加し、被災地域の方々と積極的な交流を持ちながら外出支援に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	長期の避難生活を強いられた環境の中でも安心して暮らせるよう「職員が代理家族となり家庭的な雰囲気の中、入居者に安心と潤いのある共同生活を提供する」又「その人らしい暮らし」の実現と「地域に開かれた施設」「サービスの質の向上」の為に自己研鑽や仕事に励んでいる。	職員の出勤時に常に理念を意識できるように事業所の出入口に掲示し、理念に沿ったサービスが出来るよう取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	仮設住宅敷地内で行われる「大熊町ふるさと祭り」やボランティアによる芸能発表などには積極的に出向き、大熊町の方達との再会や交流を楽しんでいる。又、以前からお世話になっていた理容師が同仮設住宅におり、定期的に散髪に来てくれている。	仮設住宅の中で行われる、「ふるさと祭り」や「伝統芸能発表会」等の行事に積極的に参加し、震災で避難された町民との触れ合いを深めている。また、同町のサテライト小学校の慰問や近隣の散歩等で挨拶を交わすなど日常的に交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	同仮設住宅で生活されている住民から施設利用等について相談を受けた際に対応したことがある。又、一人暮らしの住民から不安を話され随時見守り、対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	運営推進会議で取り上げられた要望や検討項目には速やかに改善するよう努めている。交流会参加形式では終了後にアンケートを書いてもらい意見等をすぐに反映することができた。	運営推進会議は会議形式と行事参加型で開催し、事業所の現状報告や行事への参加を得て、アンケートの実施や意見、アドバイスを頂きながら運営に反映するよう努めているが、年2回の会議開催となっている。	概ね2ヶ月毎に運営推進会議を開催し、事業所の実情報告や抱えている課題等について、意見や提言を頂き、それを運営に反映できるよう取り組みが望まれる。また、記録の整備が望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に介護保険担当の町職員が参加されている為、関係の強化はもちろん制度上の重要な情報などを頂いている。また、地域包括支援センターにも新規入居希望などの情報を交換している。	町の担当職員が運営推進会議に参加し、事業所の実情や利用者の状況について把握しており、管理者が事業所の抱える課題等の相談や実情について協議するなど協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関するマニュアルを職員がいつでも見れる所に配置している。日中は玄関・通路の施錠は行わず対応している。	身体拘束に関するマニュアルを整備し、身体拘束をしないケアに取り組んでおり、日中時間帯は玄関や通路からいつでも出られるよう施錠は行わずに支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	上記同様。虐待や不適切なケアの問題への対策の基本は、背景となる要因を分析し組織的な取り組みを行うことを認識し、職員間の情報共有や気付いたことを話し合うことで虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	これまで制度の利用に至ったケースはないが、以前入居申込者に成年後見制度利用者がいた為介護保険担当者の町職員から情報等を頂いた。又、入居検討委員会の場において話し合われる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族等からの入居相談があった際は、個々の介護状態に応じた料金や入居申し込み方法、入居検討委員会等について口頭での説明(電話相談受付可)を行っている。契約の締結や解約時は管理者が身元引受人等との面談のうえ説明し合意締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的な不満や要望などがあれば直ぐに聞けるよう、担当職員が身近な存在として日頃より接している。又、家族等の来所時には個別に管理者等の職員が対応し、意見や要望などを受付やすいようにしている。	日常生活の中で、利用者の意向や要望を聞くよう努めている。また、家族等は訪問、通院時や事業所からの電話連絡の際に、意見や要望を聞くようにし、出された意見等を運営に反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案は随時聞き入れやすいような環境づくりに努めている。申し送りノートの活用や課内会議を開催し意見が言いやすい場を設けている。	日常の業務の中で、常に職員の意見や提言を聞いたり、要望等の把握に努めている。申し送りノートの活用や課内会議で職員の意見や要望を聞くよう努めているが、課内会議の開催は少ない。	会議を定例的に開催し、職場内研修実施や職員の意見、提言を聞く機会を多く持ち、出された意見や提言を運営に反映できるよう検討して欲しい。また、会議録の整備が望まれる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員のスキルアップ(各種資格取得の為試験日や講習日に休暇を希望した場合等)目的には勤務日を調整(希望公休を認める)している。資格取得者(取得資格にもよる)については給与や身分の昇格等がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会の案内を回覧したり、順次研修会への参加を行っている。又、先輩職員が個々に指導・助言を行い教育にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会から様々な情報や研修会の案内を受けている。可能な範囲で参加出来るよう心掛けている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	慣れない土地で家族と離れて暮らす不安を受け止め本人納得の上で入居して頂いている。又、家族からの様々な情報をもとに安心できる環境設定と共に寄り添う関係であると認知して頂くよう働きかけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方も県内外で避難生活をされている方も多いため、入居者・家族への負担を最小限に考慮しながら個々の事情に合わせて柔軟な対応を行い信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談があった際、担当ケアマネジャーや町職員等より直接情報を得る事で「その時(入居の時期)の見極めや入居までのスムーズな連携が取れている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の「思い」を理解・共感し個性を引き出すよう努めている。これまで長年行ってきた「暮らし」が継続出来るよう掃除・洗濯・調理等出来るだけ一緒に行うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族も避難生活の身で県内外で生活されている方も多く、行事参加やお盆・年末年始の帰省などの協力はあまり得られていないが、定期受診は家族に対応して頂き利用料の支払いは面会を兼ねてホームに来て頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	仮設住宅の一角にホームがある為デイサービスや集会所で行われるイベントには積極的に参加し、大熊町で近所だった方や知人との継続的な交流が出来る様に努めている。	避難している馴染みの理美容院利用や仮設住宅近隣での散歩で、知人や近所だった方と挨拶を交わすなど日常的に交流が持てるよう努めている。また、家族に毎月、事業所を訪問して頂き、関係が継続出来るよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の席は入居者同士の相性を考慮し皆が不快感無く、和やかに食事やお茶の時間が過ごせるよう配慮している。又、職員が間に入ることにより入居者間の交流を深めるよう努めている。入居者同士で声掛け合いお互いに頼り合っている様子も見られる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現状としてなかなか難しい。以前入居されていた入居者の家族がホームに足を運んでくれることもあり職員も嬉しく思う気持ちもあった。継続できるよう努力していきたい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族から情報を収集したり、職員間で意見交換し本人の言動や行動だけに留まらず総合的に把握するよう心掛けている。又、通院時には必ず主治医に情報提供・相談等記入し家族に持参してもらい通院後に家族から報告を頂いている。	日常生活の中で、利用者に寄り添いながら、本人の思いや意向の把握が出来るよう、細心の注意を心掛けている。困難な場合は、家族からの情報収集と本人の仕草や表情等から汲み取り、本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族・担当ケアマネージャーからの聞き取りを行い情報収集に努めている。又、入居者との日々の会話からこれまでの暮らしの把握を常に見出すよう心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアプランは個別的な対応になっているが食事時間や入浴時間は共通の時間になっている。しかし、食事内容は個人の体質等を考慮し代替食や食べやすい形状・食器類を変更するなどし提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	サービス調整会議事前に担当職員によるモニタリングを行い会議時にケアプランとモニタリングを基にプランの検討や見直しを行っている。又、随時本人・家族の要望を聞き入れながらケアの方向性について話し合っている。	担当制を執っており、担当職員がサービス提供状況をまとめ、利用者、家族の意向確認と日々の記録等を参考にしながら関係者で意見を出し合い、現状に即した介護計画を作成している。また、状態変化時には介護計画の見直し、変更を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日勤職員を中心に日々の様子等の記録に努めている。又、申し送りノートを活用し全職員が情報を共有しながら介護計画の見直しに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	臨機応変に対応出来るよう心掛けている。 例えば入居者の急病時に病院受診の送迎や同行など、遠方や仕事で家族の都合がつかない場合なども事業所に対応するよう調整している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	特に家族(親族)の力添えが大きい。入居時から本人と家族等の関係が継続して良好に保てるよう働きかけている。例えば、本人が面会を心待ちにしている様子を伝えたり、本人が直接電話をして話が出来よう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期受診等の病院受診は家族対応で了解を得ている。ホームでの状況説明など必要に応じて職員が家族と共に同行している。 又、同行出来ない場合でも日々の健康状態等の記録を情報提供している。	本人、家族の希望する医療機関を受診でき、通院は家族対応を原則としている。受診の際は、文書で健康状態の情報を提供し、病状等によっては職員が同行支援している。また、訪問看護による健康管理の実施と緊急時の受診体制がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は昼夜を通して介護にあたっていることで、入居者の状態変化についての的確に把握し管理者に報告している。管理者が1回/週の訪問看護師へ状況説明・相談し指示を仰ぎ全職員へ伝達し、必要に応じて家族に報告し適切な対応に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は状況確認に病院に行き、本人に面会し看護師との情報交換を行っている。又、家族に連絡を入れ情報を得ている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ここでの事業再開にあたっては仮設であることを話し、将来的な見通しが立たない状況に理解を得て利用して頂いている。随時今後の対応について個別に家族と話し合い方針を共有し対応出来るように努めている。	震災避難で仮設の事業所に、大熊町の利用者が生活しており、終末期のケアが難しいことを、本人、家族に理解して頂いているが、医療と連携し、できるだけ家族に寄り添った支援に努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護師との24時間連絡体制が確立されており、事故発生時の連絡体制も確立されている。又、隣接するデイサービスセンターの看護師への協力も求めている。防災委員による応急手当の勉強会も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署立ち合い総合防災訓練を年1回実施。又、1回/月夜間想定避難訓練・日中想定避難訓練・震災訓練を随時行っている。又、仮設内の自治会長への協力依頼により訓練に参加して頂いている。スプリンクラーの設置を随時役場に依頼している。	毎月、火災、地震等の災害を想定した避難訓練を実施し、特に職員が少ない夜間体制訓練を重点的に実施している。職員はAED操作訓練、応急手当勉強会、消防機器操作訓練を実施し、消防署の指導を受けたり、地域自治会長、隣接商店員の参加を得た訓練も実施している。	震災避難先での仮設事業所で、スプリンクラーが設置されていない。利用者の生命の安全、安心の観点から迅速な対応を検討して欲しい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重し誇りや人格を傷付けない言葉かけやプライバシーを損ねることのない対応を心がけている。	人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない対応マニュアルを整備し、管理者は職員対応で問題があれば、その都度注意を促しているが、マニュアルに添った対応を全職員が徹底できるよう研修し、確認することが望まれる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を引き出すことが困難な場合もあるが、好みの飲み物・食べ物等を選んでもらう際や活動への参加など自己決定を促す言葉かけに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるものの、入居者その時の状況に応じて出来るだけ柔軟に対応している。例えば、起床時・昼寝・就眠の時間は無理に起こしたり横にしたりせず、本人のペースに合わせて対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装に関しては基本的に本人の自由に任せているが、清潔である事と寒暖の調整に気配りしている。理美容についても、毛染め等本人の希望に添える様に職員で対応している部分もある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	プランター等で育てた採れたて野菜を使い食卓に出したりした。又、食材の買い物に同行してもらい食材選びや荷物運びを手伝ってもらうこともある。食後の後始末も交換制で入居者と共に行っている。食事は職員と入居者が同じ食卓で同じ物を会話しながら食すことで楽しさを見出している。	各種調味料、好みの味等、一人ひとりの嗜好に応じた食事支援を心掛け、利用者職員が食材購入に出かけ、出来る作業を一緒に行ったり、好みの外食、季節の行事食等を工夫し、楽しく食事が出来るよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	日々の水分と食事摂取量が把握出来るよう毎日記録し健康管理に役立てている。又、個人の希望や身体状況に応じてペットボトルに白湯を入れて渡したりし提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きの声掛け・洗面所への誘導・歯磨きの介助を個人に合わせて行っている。入れ歯洗浄剤も全入居者が使用しているが、頻度は個人によって違う為その都度対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の声掛け・確認・誘導等それぞれに合わせた対応で行っている。個人の状況に応じてリハビリパンツやパットの使用を随時検討・見直しを行っている。	排泄チェック、動作、表情から、一人ひとりの排泄パターンを把握し、羞恥心に配慮しながら利用者に応じたタイミングで排泄できるよう取り組んでいる。各種リハビリパンツ、パットの組み合わせを検討し、軽費で自立支援できるよう取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個人に応じた予防に取り組んでいる	毎日排泄の記録・確認を行い排便コントロールを実施している。出来るだけ下剤等に頼らず、毎日の食事や規則正しい生活習慣によって自然排便を促すよう努めている。個人の人々の体力に応じた散歩・体操の実施や水分補給を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個人にそった支援をしている	最低週2回の入浴ができるようにしている。外出や通院、毛染めなどの個別の都合には柔軟に調整している。一人ひとりがゆっくり入浴が楽しめるよう好みの湯温にしたり入浴剤を使用している。	冬期は週2回、夏期は週3回の入浴支援をしている。毛染め等の希望に沿った支援や、季節の菖蒲湯、ゆず湯、入浴剤の使用等の希望に応じた支援にも取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、生活のリズムを整えるよう努めている。就寝前には冷暖房等により居室の温度調整をしたり個人に合わせて毛布類を使用したりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理は処方箋を家族から預かり、管理者が個人々の薬ケースに1週間分ずつつけている。その日の朝・昼・夕・就寝前分を薬ケースに移し、与薬直前にケースから取り出し本人の顔と名前を確認したうえで手渡し服薬を確認。その役割が日勤者を担当とすることで誤薬防止に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活の中でそれぞれの得意分野で力を発揮してもらっている。役割や仕事に対してその都度感謝の言葉を伝えている。(洗濯たみ・食事の後かたづけ・買い出し等)又、季節ごとの行事や野外活動・外食・ショッピング等で気分転換を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	「金融機関に行きお金をおろしたい」等の希望があった場合は、食材等の買い出し時に一緒に出掛けている。又野外活動時には以前法人で働いていた方にボランティアとして参加協力して頂いている。	仮設住宅街の仮設の事業所であり、利用者の解放感、季節の変化等の生活の豊かさに配慮し、できるだけ外出出来るよう配慮しており、各地の名所地へのドライブをしたり、夏場は気温が上昇していない朝、夕の外出支援に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人に合わせた所持金の対応をしている。全て自己管理されている入居者もあり、本人の希望があれば金融機関への送迎もしている。又、ホーム前のお店屋さんと一緒に買い物に行き、自分の目で見て購入出来るように努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者から家族や親族等に電話をしたい等の希望があればその都度対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	第一に清潔を心がけ、季節の花やタペストリー・馴染み深い小物等を飾り季節を演出している。又、冬場は外出の機会も減ることからストレスとならないよう観葉植物等も配置している。入居者居室入口には其々好みののれんを使用し、自分の部屋の目印となっている。	明るく、花卉、タペストリー、行事写真、共同作品があり、テレビを観たり、ソファで寛ぐことができる。一人ひとりの希望の席で、職員や利用者同士で楽しく話し、居心地良く生活出来るよう支援している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	仮設な為全体に狭い空間になっているが、職員で話し合い入居者の意見を摂り其々の居場所づくりに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切にし本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている	居室には其々家族の写真やこれまで使っていた小物類等など自由に配置して頂いている。	一人ひとりのプライバシーに配慮され、利用者、家族とベットの位置を相談したり、家族写真、位牌、人形、タンス、衣装ケース、ポータブルトイレ等、馴染みの物を持ち込み、安心してその人らしく暮らせるよう配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	シルバーカーを使用されている入居者でも安全にホーム内を移動出来るよう、整理整頓等に心掛けている。又、入居者個々に合わせてベットの高さを工夫するなど安全に身体機能活かした生活が送れるよう努めている。		